

上方落語における旅ネタ

Travel Stories of the Kamigata Rakuugo

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

Summary:

There are so many travel stories among Kamigata Rakugo tales, while quite a lot in the Edo stories. In those stories, travelers depart from Osaka and head for various directions: the longest series containing more than 20 sections moves around the states of Settsu, Yamato, Iga, Ise, Owari, Ohmi, and Yamashiro, the main purpose being a pilgrimage to the Ise Shrine; a westbound journey for a pilgrimage to the Kōpira Shrine in Shikoku; a northbound one for Ikeda in the north of Settsu; a southbound one for Kishu. Not only of those travels to the actual visits to the neighboring areas, but so interesting are those traveling to the imaginary places: the most fantastic is the story of visiting the inferno, lasting for one hour; a story visiting the heavenly world; a traveler dive into underwater in a flask. The contrast between ordinary travels and visits to imaginary places is one of the keys to this paper.

第一節 はじめに

本稿では、上方噺の旅ネタを集めてみる。江戸ネタに比べて、上方噺には旅ネタが多いのが特徴である。日本国中どころか、異国、海の底、天上界、地獄までありとあらゆる所を巡る噺が拵えられている。長屋などでの慎ましい日常生活を描くネタと違い、旅というのは非日常である。歩くしか移動手段がなかった時代、旅に出るのは苦難の連続であったろう。泊まりを重ねるので路銀が嵩むし、道中は危険が伴う。海の底へ潜る『小倉船』、天上界に登る『月宮殿星の都』、地獄巡りの『地獄八景亡者戯』など、非日常どころか、この世にない世界を旅するというのは想像力の産物である。ぶらっと立ち寄ることができる近所の寄席で、旅ネタによって非日常に誘われる、というのが演芸という手軽な娯楽の魅力であろう。

ここで、『伊勢参宮神之賑』発端で語られる口上を紹介する。この口上は、噺家が弟子入りとするとまず教えられるもので、右手に張り扇（別名を「叩き」という）、左手に小拍子を持って見台を叩きながら口馴らしの稽古をするのである。叩きは、声の調子を張り上げるという効果もある。「叩き三年」と言い、三年間はこのような口馴らしで噺家としての口調を身に付けるのである。ここの口上で、旅ネタを言い並べる段がある。

東にまいりますのが『伊勢参宮神之賑』、西へまいりますのが『兵庫の渡海、鯨の見入れ』、北へまいりますのが『池田の猪買い』、南へまいりますのが『紀州飛脚』、天に昇りますのが『月宮殿 星の都』、海に潜りますのが『竜宮界 竜の都』、異国を巡りますのが『島巡り 大臣の

屍』、あの世へまいりますのが『じ こくばつけいもうじやのたわむれ地獄八景亡者戯』といろんな旅を仕込んでございます。

これらは実際に今にまで伝えられている旅ネタである。まずは、大坂から見て東西南北という方角が揃えられている。これらの旅は、現実には即した写実的なネタである。お茶屋や宿も実名で、実際の旅案内としても有用であったという。異国巡りをする『島巡り』は、鎖国体制を敷いていた江戸時代にあっては実現は不可能な空想の世界であったろう。天に昇ったり海に潜ったり地獄巡りをするという旅は、専ら想像の産物である。舞台装置も不要で一人芸である落とし噺ならでは、という強みを活かしていると言える。反面では、聴き手の想像力に頼ることになるのであるが。

明治になってから鉄道が敷かれたが、列車の旅というのは新作ものを除いて噺にはない。唯一、梅田～京都間に汽車が開通してからの噺というのが『胴乱の幸助』である。幸助はんが帯屋の揉め事を捌くと息巻いて京に上る運びになるが、旧弊な幸助はんは当時まだ残っていた三十石で一晩かかって伏見の浜に着く。お半と長右衛門はとうの昔に桂川に身を投げた、と知った幸助はんは「しもた、汽車で来たら良かった」でサゲになる。一日早く来ていたとしても、元々が間に合うものではなかったのである。三十石舟は、鉄道が開通してからも十年ほどは残っていたという。

また旅ネタの中でも、船旅ものは独立した領域を占めているとも言える。それはつまり、一艘の舟に十人なり二十人が乗り込み、道中を共にするということから、多様な展開が生まれるという点である。船中では、お国の尋ね合いから始まり、謎かけ問答をしたり、爛の道具一式を持ち込んで一杯飲んだり、好き放題である。これが陸路であれば、喜六と清八の二人が歩いているだけで、変化に乏しい。旅人にとって船旅は、体を休めている間に旅程を稼ぐことができるという便利な手段だったのである。

第二節 『伊勢参宮神之賑』

旅ネタの多い上方噺でも、代表的なものはお伊勢詣りの噺である。当代の文我師『東の旅通し口演』には、発端から始まって三十石、続編として『宿屋仇』までを一連のお伊勢詣り噺として纏めている。道筋から言うと、玉造を出て暗がり峠で生駒越えをして、初日は奈良泊まりであろう。翌日は奈良見物をするのが順当と思われるが、高座で演じられる折は、発端から煮売り屋に入ることが多い。煮売り屋は、田舎道で山に近いということになっているので、道筋としては奈良から桜井へ南下する途中のように思われる。煮売り屋からは七度狐に続くのであるが、その先で伊勢街道を經てお伊勢詣りをする道中は、『常太夫儀太夫』や『軽業講釈』など、時折高座に掛けられる噺が断片的に伝わっているような様子である。そして、肝腎のお伊勢詣りは、長い間高座に掛けられていないので伝わっていないというのが実情である。帰り道は、近江路を經るので『矢橋舟』、『瘤弁慶』、『三十石舟』と繋がる。全編を通すとなると、二十話を超える一大長編である。

文我師が再編した東の旅通し口演の外題は、次のようになっている。括弧内に、想定される地名を書き添えてある。

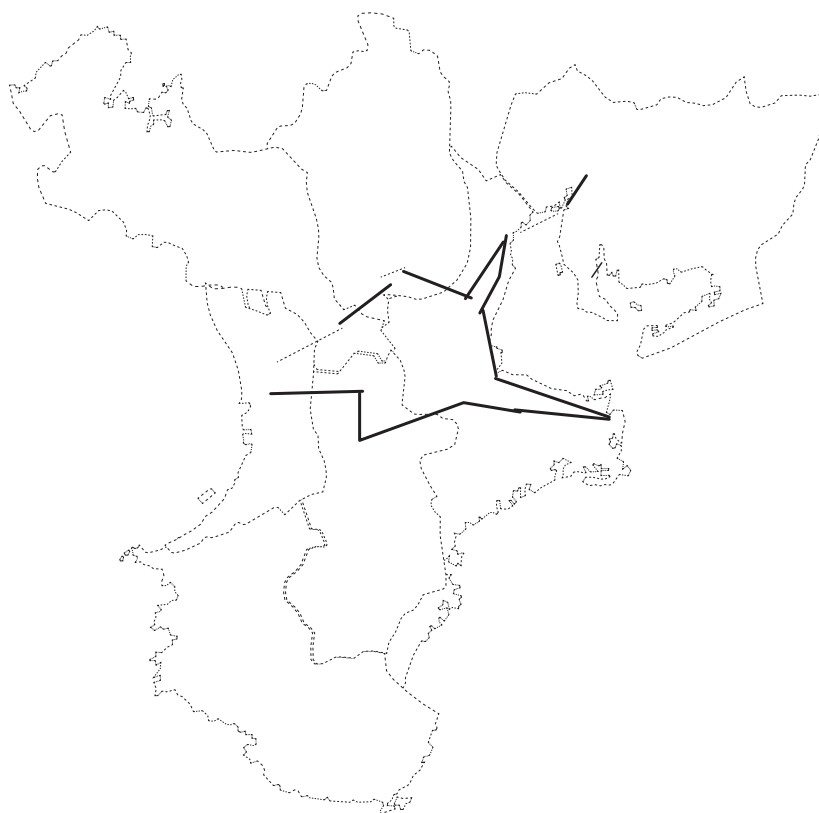
『発端』（奈良に入るまで）

『奈良名所』（采女の宮、十三鐘、三作の石子詰、春日大社、三笠山、手向山八幡宮、東大寺）
 『野辺』（奈良から南下の道中で尻取りなどしながら歩く）
 『煮売り屋』（腹ごしらえのため、食べたり飲んだり）
 『七度狐』（狐に騙されて恥をかく二人）
 『軽業』（白鬚神社で正遷宮の興行）
 『軽業講釈』（『軽業』と部分的に重複。軽業小屋の隣で講釈師も興行）
 『常太夫義太夫』（「つめたい、ひだるい（空腹）」との地口）
 『うんつく酒』（^{はいばら}榛原、造り酒屋で利き酒）
 『鯉津栄之助』（^{あかばね}赤埴・^{もろきの}諸木野、「こいつあ、ええ」の地口）
 『三人旅』（源兵衛が加わり道中は三人になって、馬に乗る）
 『浮かれの尻買い』（本街道、田丸の宿）
 『宮巡り』（外宮と内宮に参拝、お杉お玉が三味線の曲弾き）
 復路
 『桑名船』（七里の渡し、江戸落語『巖流島』と同趣向）
 『軽石尻』（坂ノ下、酒に軽石を混ぜると放屁が止まらなくなる）
 『高宮川天狗酒盛』（土山、天狗になりすまして山賊の上前をはねる）
 『コレコレ博打』（水口、博打に手を出してすっからかんに）
 『矢橋船』（八橋の渡し、船上で雀売りと侍が一悶着）
 『瘤弁慶』（大津の宿で壁土を食べた男、弁慶が瘤になって出てきた）
 『走り餅』
 『三十石 夢の通り路』（京見物の後、伏見から三十石舟に乗って天満の八軒家へ）

最初の五篇は、高座で実演される型では『発端－野辺－煮売り屋－七度狐』で通し口演になることが多い。それでも通すと一時間を超える。どういうものか、『奈良名所』は高座に掛けられる機会が少ない。『猿後家』で「猿沢の池」を引き出すために奈良見物が採り入れられているが、お伊勢詣りの道中で語られることが少ないのは不可解である。

続く『軽業、軽業講釈』も時折高座に掛かるが、前述のように、その後は肝腎のお伊勢詣り後に復路にかかるが、『矢橋船』『三十石』までの途中は、今では詳しい筋が分からないという噺ばかりなのである。しかし、上掲の粗筋を見ているだけでも、道中で酒を飲んだり博打をしたりと、喜六清八の二人連れが面白可笑しく旅を続ける様子が窺える。途中、三人目として源兵衛が加わる噺もあるが、これは二人よりも三人連れにした方が筋が運びやすいというご都合主義であらうか。

玉造を出てから、お伊勢詣りと熱田神宮参拝を済ませて、近江路を経て帰って来るまでの旅路を地図上に辿ってみた。旧国名ではなく、現代の府県境で示している。点線区間は、桑名と矢橋と三十石の船旅である。



旧国名で辿ってみると、摂津－河内－大和－伊賀－伊勢－尾張－近江－山城と経巡って、往復で十日ほどであったろうか。こうして地図上に示してみると、大坂からお伊勢さんまで最短経路で旅をしているようであるが、道中は山越えなどで険しい道のりであったろう。

以下では、お伊勢詣りの旅ネタから、『発端～煮売り屋～七度狐』と『三十石』から抜粋して待遇表現を探ってみる。

『発端～煮売り屋～七度狐』

先にも述べたように、上方噺には旅ネタが多く、『伊勢参宮神之賑』はその代表格である。しかも旅の発端は、前座修行の口上をも兼ねて小拍子と張り扇（叩き）で見台を叩きながら喋るという構造になっている。口上が終わると、前掲のような旅ネタの紹介になる。そこから、自然に本題のお伊勢詣りに入っていくような流れになっている。

喜六と清八の二人連れ、近所の連中や友達は玉造まで見送りで同道するというのが習慣であったという（『米朝全集』第一巻）。

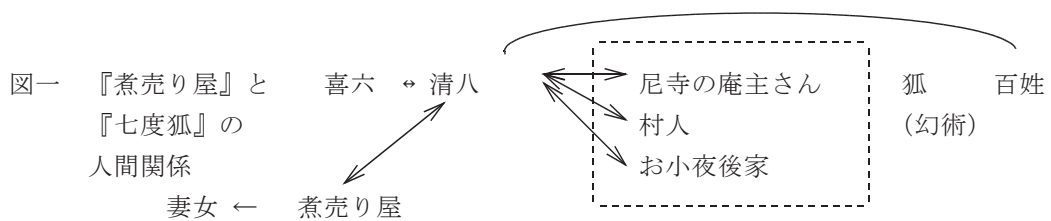
(1) 大坂離れて早や玉造、枳屋芳兵衛、鶴屋秀次郎という二軒の茶屋がございまして、ここらを二軒茶屋と申します。ここで酸い酒の一杯も呑みまして、見送りの友達と別れますという、あとは二人連れでございます。さあ出といで、心得た。中道、本庄、玉津橋から深江へと

出てまいります。笠を買うなら深江が名所、てな歌がございまして、笠が名物でございます。
名前は深江笠でもその実は浅い笠を一蓋ずつも買い求めますと、高井田から藤の茶屋、御厨、
額田、豊浦、松原うち越えてやってまいりましたのが暗峠でございます。「暗がりといえど明
石の沖までも」面白い句が残っております。二十五町下りまして、やれやれと思う間もなく
檜の木峠、上りが雀の茶屋で下りが砂茶屋でございます。尼ヶ辻から道が迫分になっておりま
して、右が大和の郡山、左が南都は奈良でございます。

南都とは南の都と書くのやそうございまして、「古の奈良の都の八重桜 今日九重に匂い
ぬるかな」と、結構な歌が残っております。奈良には印判屋庄右衛門、小刀屋善助という二
軒の大きな旅籠がございまして、幾日逗留いたしましても、夜具と家具とが変わるのがこの自
慢やそうでございます。

「大坂離れて早や玉造」と言うのと、「玉造は大坂ではない」という態になっている。東の旅全体
を通して、このように語られる道中は史実にも忠実であって、旅行案内を兼ねているとも言え
る。玉造の枳屋芳兵衛、鶴屋秀次郎という二軒の茶屋にしても、奈良の印判屋庄右衛門、小刀
屋善助という二軒の大きな宿屋にしても、実名をありのままに語っているのだという。深江と
高井田の間に摂津と河内の国境があった。そのまま東進して、暗峠で生駒山を越えたようであ
る。今では歩いて生駒越えをしようという奇妙な考えを持たない限り、到底選ばないような険
しい道のりである。生駒山系を避けようとすれば、八尾を抜けて藤井寺、柏原まで大きく迂回
をせねばならない。険しい峠越えであっても、郡山を経て桜井に抜ければ、旅程は一日短縮す
ることができる。しかしお伊勢詣りの道中、奈良見物もしておきたいというのが人情であろう。
ここでも、奈良の旅籠が紹介されているというのは、そこに逗留するという示唆になっている
のであろう。ところがどういう訳か奈良見物は割愛して、野辺の道中から煮売り屋へと繋げる
のが今の主流である。奈良見物は独立した一話になっているので、間に挟むのには具合が悪い
というような都合もあったのであろうか。

そういう事情から、発端から煮売り屋の手前までは喜六と清八が二人だけで道中をしている
場面である。そこでは常に「わい、お前」というように最も親しい間柄での人称代名詞使用で
あった。『煮売り屋』の中では、店主の親爺さんとの会話になるが、専ら清八が対応してお
り喜六は絡んでこない。更に『七度狐』は、二人が放り投げた播り鉢が昼寝をしていた狐に当
たり、この狐が幻術で二人に仇を返すというように場面が変わる。幻術によるとは言え、麦畑
を踏み荒らしてお百姓に咎められた後、山道に迷い込んで尼寺で一宿を請うというように筋が
進む。時間的には、麦畑を踏み荒らした直後なのであるが、いきなり日が暮れて真っ暗になっ
たと二人は錯覚したことになっている。幻術によって次々に怪しの者が出てくるが、極めつけ
は亡者になって化けて出る金貸しのお小夜後家である。尼寺の庵主さんがお通夜に出かけると
いうのであるが、貸した金に思いが残って、棺桶の蓋を撥ねのけて出てくるという。これら人
物像を図示してみる。



『煮売り屋』の段は写実的であるが、これはこれで面白い。『七度狐』に移ると一転して、思いも付かないような恐怖の境地に入っていく。話術によって聴き手の想像力を掻き立てるといいう、話芸の本質が発揮されている。狐は喜六と清八に仇返しをするのに幻術を使うが、「おのれ憎いは二人の旅人、」という狐言葉による台詞があるだけで*1、サゲで幻術を破られて追われる場面でも一言も喋らない。

二人連れは煮売り屋を見つけて、腹拵えをしようと店に入る。まずは料理の注文なのであるが、親爺っさんの応答が何とも珍妙である。

(2) 清 「ほな親っさん、そのどじょう汁ちゅうのんもらおかい」

親 「ああそうかな。これ、婆どんや、客人どじょう汁がええと言いなさるでな、こなた、すまんがちょっと町まで味噌買いに行っとおくれ。わしゃ、箆持って裏でどじょうすくいに行くさかい」

清 「ちょ、ちょっと待った。なんや気の長い話やけど、町まで味噌買いに行くて……………遠いのやろ」

親 「いやいや近いもんじゃ、山越しの三里」

清 「三里」

親 「田舎もんじゃで、山道は慣れとりますで」

清 「ああえらいもんやなあ。山道の三里ぐらい半刻もあったら行ってくるか」

親 「はいはい、ものの三日もありゃ……」 (中略)

親 「はいはい、婆どんや、くじら汁がええと言いなさるで、大急ぎで握り飯十ほどこしらえとおくれ。わしゃ草履に後がけして熊野の浦まで鯨買いに行てくる」

味噌を買いに町まで出かけるの、熊野の浦に鯨肉を買いに行くのと、現実離れた気の長い話である。煮売り屋の当主は、妻女を「婆どん」という呼びかけと共に「こなた」という対称詞でも呼んでいる。「鯨汁がええと言いなさる」というように、補助動詞「なさる」は市中では余り耳にしない。泥鰌汁や鯨汁は、お品書きとして紙に書いて貼ってあったのであるが、具になる泥鰌や鯨の身がないので、喜六と清八は作り置きの高野豆腐などを食べている。続けて清八が酒のことを尋ねるのであるが、これがまた料理の話に輪を掛けたような珍妙な問答である。

(3) 清八 「おやっさん、酒はあるか」

親爺 「はいはい、この村には銘酒がございますで」

清 「銘酒結構やなあ、なんちゅう名前や」

親「「村さめ」に「庭さめ」に「じきさめ」というてな」
清「あんまり聞かん名前やなあ。その「村さめ」っちゅうんはどんな酒かいな」
親「はい、ここで呑んでましたらホロッと酔いが回って何ともいせん気持ちになります」
清「はあ、そこらが酒の身上^{しんしよ}やなあ」
親「それで、この村を出外れる頃に醒めますで「村さめ」じゃ」
清「なんや、頼んない酒やなあ。ほたら「庭さめ」は」
親「ここで呑んでて、庭へ出ると醒める」
清「「じきさめ」は」
親「呑んでる尻から醒める」
清「それやったら、呑まん方がましやがな……。なんやろな、そういうのは酒ん中にぎょうさん水廻してんねんやろな」
親「そんなことしやせんで、水ん中へ酒廻します」
清「うわあ、水臭い酒やなあ」
親「いやいや、酒臭い水じゃ」

仮にも商売気があるならば、売り物を上手に勧めて売り上げを多くしようと努めるであろうが、煮売り屋の親爺っさんは正直すぎるというのか、「酒臭い水」とまで暴露している。これを真に受ければ、飲む気も失せるであろう。それでも「銘酒」と銘打っている。昔、小売の酒屋は醸造元から酒を仕入れ、店独自で調製して販売するのが常であった。だから酒に名前は付いていなかった。買う方は徳利などを持参して、量り売りであった。それに対し、蔵元が名前を付けて酒屋に卸す酒、小売酒屋が手を加えていないものを「銘酒」と呼んだのである。ご丁寧にも、その銘酒に「村雨、庭雨、直さめ」と三種類あるという。言葉遣いには、煮売り屋の主と客という関係で待遇表現が具現化されている。「この村には銘酒がございますで」というように、至って丁寧である。

作り置き of 副菜に、名前だけは銘酒という頼りない酒を飲んでた二人は、目の前に烏賊の木の芽和えがあるのに目を付ける。尋ねると、「これは売り物ではなしに、村の寄り合いに出すのに拵えたもんじゃ」と頑なである。業を煮やした清八が、一計を案じてその木の芽和えを搦り鉢ごと持ち去る。店からは追っ手も届かぬほどの遠いところまで逃げおおせて、搦り鉢ごと平らげたのち、足が付いては具合が悪いというので搦り鉢を辺りの草むらに放り投げた。それが昼寝をしていた狐の額を割り、次の『七度狐』へと入って行く。

『七度狐』

お伊勢詣りは、元来が発端から三十石で大坂に帰って来るまで連続二十席以上の続き読みであった。道筋を辿れば、生駒を超えて奈良で一泊、桜井まで下って伊勢街道に入り、お伊勢詣りを済ませた後に桑名の渡しで熱田神宮に参詣し、東海道を辿って近江に入って帰って来るという往復だけならば、五日か六日ほどの行程であったろうか。近いとは言え、あちこちと寄り道をしたくなるのも人情であろう。帰路は往路と別の道を選んで近江路に廻って京見物というのが、誰もが考えるであろう道筋になっていたことは想像に難くない。

嘶『七度狐』は、道筋としては奈良見物の後に桜井まで南下して伊勢街道に入る山道での出来事と捉えると腑に落ちるように思われる。奈良から桜井までは盆地で、大和三山にしても標

高は二百米に満たない。桜井から東進すると笠置山地に架かり、途端に山深くなる。『七度狐』で、狐の幻術に化かされて山奥の庵寺に迷い込んだという筋書きにはお誂え向きである。伊賀国に入る道は比較的平坦であるが、伊賀から伊勢に入るには青山の峠越えが険しい。

嘶では『煮売り屋』からの続きで、喜六が放り投げた播り鉢が狐の額を割り、恨みを買う。〈来序〉というお囃子が入り、狐言葉という語尾を伸ばす独特の調子で、「おのれ、憎いは二人の旅人。人のものを盗み食ろうばかりか、ようも稲荷のお遣わしたる狐にもものを投げつけたな。思い知らさん、今に見よ」と姿を消す。狐は仇を返すのに、まず小手調べとして喜六と清八に麦畑を大きな川と錯覚させる。二人は着物を脱いで川渡りをしていたところを、畑の持ち主で野良仕事をしていたお百姓に心付かされる。川を渡っていたというのは幻覚で、麦畑を踏み荒らしていたのである。

これはまだ序の口で、狐は続けざまに二人を騙す。麦畑を後にして本街道を目指していた筈が、急な山道に差し掛かって日が暮れかかったと思い込む。まだ昼過ぎで、実際は麦畑の周辺をうろうろしているだけなのであるが、狐の幻術によって、とっぷりと日が暮れた山道を二人ながらとぼと歩いているように錯覚している。麦畑と比べると、時間軸と言い、山深い庵寺に迷い込んだという場所柄と言い、大掛かりな幻術である。鳴り物も入り、山寺での恐怖を織り込んだ大ネタである。

真夜中に山中の尼寺に行き着いたと思い込んでいる清八は、一宿を乞う。

(4) 八 「伊勢詣りの旅の者でおますのやが、道を取り違えまして、行き暮れて難渋しとおります。一晚ご厄介になりたいんでおますけれども、いかがなもので」

尼 「それはそれは、お気の毒なことで。が、当寺は尼寺でございますのでな、殿方をお泊めするというわけにはまいりませんので、下の村のお庄屋さんのところへでも行て、頼んで泊めてもらいなはったらいかがで」 (中略)

尼 「男の方をお泊めするというわけにはまいりませんが、本堂でお通夜をなさるといふのなら、雨露だけはしのげますがのう」

八 「へえ、それで結構で、どうぞよろしゅうお頼申します」 (中略)

尼 「さあさ、どうぞこちらへ、掛け金も何もかかってない。どうぞお入り・・・・・・・・そこにたらいがございます。水もそれに汲んでございますので、足袋脱いで草鞋脱いで、足洗うてこっちへどうぞお上がりを」

六 「清やん、せっかくやけど、やっぱり去のか」 八 「なんで」

六 「なんでて、尼はん、むつかしいこと言うたはるで。足袋脱いで草鞋脱げやなんて…………草鞋脱いでからやないと、足袋は脱げん」

喜六は平生はものを言わないが、ここだけは妙な理屈を捏ねる。庵主さんは「足袋脱いで草鞋脱いで」と物の弾みであったが、なるほど順番としては草鞋を脱いでからでないと足袋は脱げない。喜六が言う通りである。「本堂でお通夜」というのも立て前で、清八はそれは表向きと心得ている。本堂に入ってしまうえば、何をしようと勝手である。二人が旅装を解いたところを見計らい、庵主さんが空腹の具合を尋ねる。聞けば、月に一度開山のご聖人に報じる「べちよたれ雑炊」を用意してあるという。二人は訝りながらも口にする。

(5) 八 「もうし、庵主さん、この、舌の先にざらざらしたもんが残りまんのやけど、これは一体なんでおます」

尼 「味噌が切れたもんで、山の赤土が入れておまんのや」 (中略)

八 「なんや、一寸ぐらいに切ってあってな、噛みしめると甘い汁が出まんのやが、この藁みたいなのはなんでんねん」

尼 「そら、藁みたいなのはもんじゃない、藁でおます」

八 「……………聞いたか。言いようがあるもんじゃない、おい。藁みたいなのはもんじゃない、藁やて。藁が食べますか」

尼 「あれは体をほこほこと温めますでなあ」

八 「ほいほい、藁食うて土食うて、これで左官飲んだら腹ん中に壁ができるがな……………草みたいなのは出てきましたが」

尼 「それは、げんげん花の陰干しで」

八 「体毒下しやがな……………もうし、蛙みたいなのは出てきましたが」

尼 「出すのん忘れとりました。だしを取るために、いもりが入れてある」

清八は、雑炊に入れてある具材一つ一つを庵主さんに尋ねている。べちよたれ雑炊という名前通りに、一通りでない具材を炊き込んである。「藁みたいなのはもんじゃない、藁でおます」というのも、一つの話術であろうか。壁を塗るのに土に藁を混ぜるというのは分かるが、左官を腹に入れるというのは無理がある。しかしこれが全て、幻術によって二人が惑わされて雑炊を食しているように見せるのである。舞台装置も衣装も要らない、噺ならではの演出と言える。ここまで二人は辛抱して食べていたが、いもりを見つけたところで音を上げる。それを見透かしたかのように庵主さんは、下の村で葬式が取れたので二人に留守番を頼むという。狐の幻術は後から後から取り返しの付かないような危ない状況へと追い込むように仕組まれているのである。

(6) 尼 「いやいや、この寺も宵の口はさびしいようでございませうがな、夜が更けますとまた賑やかになりますでなあ」

八 「……………けったいな寺やな、この寺。宵が静かで夜中が……………ははん、庵主さん、あんたがまだ若うておきれいなさかい、村の若い衆が夜中に肩入れに来たり遊びに来たり」

尼 「いや、そのようなことはございせんが、本堂の真裏が墓場になっておりまして、夜中過ぎますと骸骨がぎょうさん出てきて相撲をとったりいたします。はっけよい、残った、ガチャガチャ、まことに賑やか……………」

賑やかは賑やかでも、骸骨が相撲を取る音だというのである。まだこの後も続きがあって、散々に二人を怖がらせる。極めつけが、金貸しのお小夜後家である。高利で貸して強引に取り立てていた評判の悪い後家さんであったが、昨日ぼっくりと亡くなったという。ところが貸した金に未練があって、棺桶の蓋を撥ねのけて「金返せ」と出てくるのだという。怖がって「夜伽日延べを」と乞う二人を残して庵主さんが寺を後にして出て行った途端、夜嵐が吹き荒ぶ。その中を、お小夜後家の棺桶を担いで村の連中が山道を登ってきた。庵主さんと行き違いになっ

たので、取り敢えず棺桶を寺に置いていくという。「棺桶がミシッ、ミチッ、メリ、メリメリメリ、かけてあった縄がばらりとはずれ、蓋がぼーんと飛びますと、中から老いさらばえた老婆が、枯れ木のような手を差しのべて、それへずうー」と、擬音語が臨場感を高める。〈ねとり〉というお囃子が入る。

(7) 婆 「・・・・・・・・金返せ、金返せ」
八 「出た出た、出たーあ。私ら、あんさんにお金なんか、お借りした覚はございませんで。違う、人違い、人違い」
婆 「金、^{かや}返せ」
八 「私ら、旅の者でおます。旅の者、旅の、伊勢詣りの旅の者でおます」
婆 「・・・・・・・・伊勢詣りか。顔を見せ・・・・・・・・顔を見せ」
八 「よう見せんよう見せん。顔なんか見せられますかいな、ああ怖い・・・・・・・・」
婆 「見せな、そこへ行く」

余りの怖さに、二人は目を瞑って顔を伏せていたのである。怖さ故か、言葉遣いも丁寧である。「私ら、あんさん」という人称代名詞にしても、「おます、ございます」という叙述形にしても、語用論的と言うよりも恐怖の余りに感情的になったとしか考えられないような話し振りである。「金返せ」は、二回目に振り仮名を振っているように、「金かやせ」という音の方が実感がこもる。お小夜後家が二人に伊勢音頭を唄わせている場面で、川渡りの折と同じお百姓に正気付かされる。掴まえて懲らしめようというので四人がかりで狐を追いつめて、尻尾を引っ張ったところが、畑の大根を抜いていた、というのでサゲになっている。

ここで『煮売り屋』と『七度狐』を通して、人称代名詞使用について表に纏めておく。

表一 『煮売り屋』と『七度狐』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞			
喜六、清八	私	わて	わし	わい
煮売り屋			わし	わい
村人	わたい		わし	

対称詞

話し手	対称詞（相手）			
喜六、清八	あんさん（婆） あんた（尼、婆） おまはん（煮売り屋） お前（互い）			
煮売り屋	こなた（妻女） あんた（喜六、清八）			
百姓	お前ら（喜六、清八）			

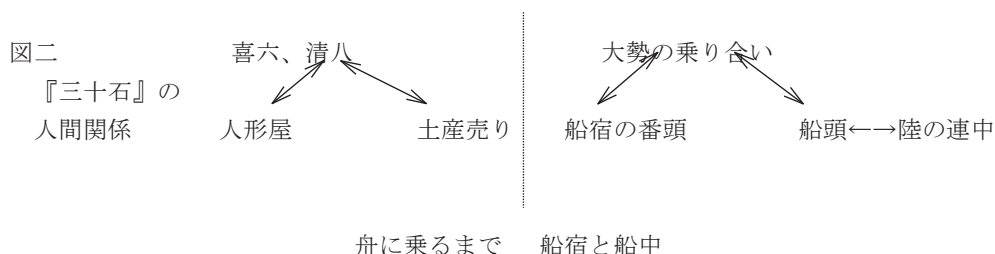
相対的に、二席を通じて人称代名詞使用は少ない。喜六と清八については、お小夜後家に対して恐怖の余りか「私、あんさん」と丁寧である。他の場面でも、自称詞「わし、わて、わい」と対称詞「あんた、おまはん、お前」を使い分けている。煮売り屋の親父っさんが妻女を呼ぶ「こなた」というのも、意外に敬度が高い。客の喜六や清八に対して「あんた」と呼んでいる

以上に、身内に敬意を払うようでもある。客商売ではないお百姓が喜六清八に対して「お前ら」と呼ぶのは、それなりの対応かと思われる。

『三十石舟』（第三巻）

長かった東の旅も終わりに近づき、『矢橋船』や『瘤弁慶』で近江路を巡った後、京に入ってくる。京見物は京極や寺町、八坂神社を通り過ぎたぐらいで伏見の浜から三十石舟に乗って天満まで帰る。舟に乗る前に、京見物と人形買いの段がある。京見物は三条大橋を渡って京の街に入り、四条大橋から八坂神社へと向かう。寺町、京極の辺りは、今も昔も変わらず繁華な場所である。四条通の突き当たりが八坂神社で、そこから東山沿いに南に下ると、全国お稲荷さんの総本山である伏見稲荷である。単に「お稲荷さん」といえば、この伏見稲荷大社を指すのである。伏見人形というのは、当時は代表的な京土産であった。しかし今では、お稲荷さんの門前を歩いても伏見人形の店は一軒しか残っていないという。そして伏見の浜で三十石の夜舟に乗り込むのであるが、場面によって喜六と清八以外に誰が加わっているかというのが異なる。京見物では、二人があれやこれやと喋りながら街を歩く。会話だけで、どこを見物しているかも示される。「さあ、ここが祇園さんやで」「ぎおんさん（仰山）の人やなあ」という具合である。人形買いでは、人形店の主が応対する。舟に乗る前に、珍しく喜六が土産物売りと話进行を交わす。いつも喜六は清八とだけ話し、他の者と話している場面はないのである。そういう観点で、珍しい。舟に乗り込むと、他の船客と紛れて誰が喋っているのやら分らないようになる。一つには、何十人ももの乗り合いで、賑やかである。船旅にお定まりの所の尋ね合いやら、最後にもう一人詰め込んで欲しいという船頭の頼みやらで、ごった返すような騒動である。もう一つには、あちこちを旅している人々を採り上げて、漸に変化を持たせようという意図もあるであろう。

人間関係を図示すると、船中とそれ以前でくっきりと分かれている。舟に乗る前でも、船宿で番頭が宿帳を付ける場面も独立している。三十石舟に乗り込む段以降では、喜六と清八は他の船客に紛れてしまう。



この図では「大勢の乗り合い」と一括りにしたので、単純化されてしまっている。実際には、乗り合いが何十人という大人数であり、乗り合い同士の掛け合いも以下に書き切れないほどである。右端、「陸の連中」というのは、舟が中書島に差し掛かってから船頭と世間話をするような場面である。

京見物は喜六と清八の二人が喋っているだけであるので、伏見人形を買いに一軒の店に入る段を見てみよう。主が応対する。

(8) 六 「わしゃあの戎大黒より、こっちの店の暖簾から首突き出してる丁稚のほうがようできてと思うで。あの鼻たらしてる具合といい・・・・生きてるようながな」

八 「あら、生きてるのやがな」

六 「ああ・・・・あら生きてんのか。ものでも言いそうな」

八 「言わいでかい。まあま、このへんへでも入ろうかな。じゃまするで」

主 「へえ、お越しやす。どうぞこっちへ」

八 「ああ、ぎょうさん並んでるなあ、お前とこ。ここにあるものは、なんでも売るかえ」

主 「へえ、なんでも買うていただきますでな」

六 「そうか、ほんならあの暖簾から首突き出してる丁稚な、あれ鼻拭いてなんぼにしとく」

主 「・・・・これ、引っ込んでなはれ、これ。あらあんた、うちの倅でんねん」

六 「ああ、あらおまはんとこの息子かいな。なんぼや」

喜六は、丁稚を兼ねた店の倅を売り物と考えている態で一貫している。「ものでも言いそうな」「言わいでかい」というのは、反語である。「言わいでかい」というのを統語分析すると、「言わ（言うの未然形）＋い（接続助詞）＋で（接続助詞）＋かい（終助詞）」という、比較的単純な構造であろう。しかし仮に標準的な現代日本語で言い換えるとなると、「言わないということがあろうか」とでもするより仕方がないであろうか。つまり「言わいでかい」では、前半部分しか言語化していないのである。店主に対して清八は「お前」、喜六は「おまはん」である。対して店主は「あんた」と喜六に呼びかけている。

船宿では番頭が宿帳を付ける。これは乗船名簿を兼ねている。所と名前を尋ねて記帳するのであるが、鴻池善右衛門、住友、幡随院長兵衛、照手姫、小野小町、武蔵坊弁慶などなど、皆好き勝手に名乗っている。察するに、この宿帳というのは形式的なもので客もありのままを申請する必要などないと考えていたものであろう。

そしていよいよ舟に乗り込むのであるが、乗り合いが決まって満員になったところで、船頭が「お女中じゃけえ、一人お頼き申しますでう」ともう一人乗せて欲しいと無理を言う。船頭は、独特の荒い言葉である。「お頼みもうします」が「お頼き申します」となっている。お女中と耳にして、若い男が妄想を膨らませる。二十五、六の年増であろうと思い込んで、乗る場所がないことから、自分の膝へ座らせると言い出すのである。以下は、空想上の対話である。

(9) 男 「姐さん、あんた眠^{ねぶ}となったら、わたのここ（肩）へもたれて寝なはれ」

女 「まあ、そんなことしたらあんさんのおべべに油がつきまっじゃないか」

男 「ほんならここへちょっと手拭いをこうかけときまっさかい、遠慮せんと頭もってきなはれ。その代わり私もな、ここへ手拭いかけさしてもろて、そこで頭をちょっと休ましてもらいまっさ。それであんた、手でわたの首をぐーっと抱きなはれ。私もあんたの腰のところをこう、しっかりと持ってますさかいな」（ト書き：翌朝、舟が八軒屋に着く）

女 「まあ兄さん、いろいろとお世話になりました」

男 「いやいや、妙なご縁で心安りましたが、どちらへお帰りで」

女 「私は松屋町筋の和泉町をちょっと入ったところですけども、兄さんはどちら」

男 「私は久宝寺まで帰ります」

女 「ああ、ほんなら同じように南へ行きまんねやさかい、ご一緒しまひょか」

男 「そういたしまひよかな」

と、妄想は留まるところを知らない。これから松屋町筋の家に寄って、二人で酒を飲むとまで想像を一方的に語る。周囲の者も、呆れながらも面白半分で聞いていたことであろう。しかし舟に乗り込んで二人で姿勢を決めた後、船中での描写はなく、いきなり翌朝に天満の八軒屋まで話が飛んでいる。男の自称詞は「わて、私」、女も「私」となっている。対称詞は男からは「あんた」で逆は「あんさん」である。男の一方的な妄想ではあるが、会話そのものは写実的である。長々と一人で喋っていたところへ、船頭が「お頼申しますでう」と連れてきたのは、六十過ぎの老婆であった。男の妄想は呆気なく萎んでしまうのであるが、船頭は「お婆んでもお女中じゃ」と言い張る。脇筋を長々と喋るのであるが、船中で随一の聞かせ所である。

舟は宇治川の本流に出るまで、陸上と会話ができるぐらいの距離感であつたらしい。今でも中書島界限には、三十石舟が行き来したような細い堀割が残っている。春や秋には往時の舟を再現した観光船が就航することもある。宇治川の本流に入ると、川幅も格段に広くなり、流れも変わったであろう。船頭の話し相手は遊郭の娼妓らしいが、船頭は言葉が荒い。話し振りがらすると、もう一人船頭仲間が加わっているようである。

(10) 女 「勘六さんやーい、その船、上りかな、下りかなー」

船頭一 「・・・・・・見よれえ、橋の上へ美しい街妻（女の意）が顔をば^{いだ}出して、船エ上りか下りかちゅういよぞ」

勘六 「なんかすぞい、年がら年中七分船頭相手にしてて、上り下り分かんちゅうのはどした女子じゃな。くりぬいて放つてしまえー、そんな目玉」

船一 「そう言わんもんじゃい。上り下り、船頭のしてること、わからんうちが花じゃと思え。船頭のしよることわかるよになったら、わしらのてこにおえりゃせんわい」（略）

女 「大坂へ行たら、小倉屋の鬘付け買うて来てやー」

船一 「なんかすぞい、お前らのど頭^{たま}に小倉屋の鬘付けが似合うかい、牛の糞^{ばば}でもなすくつとけー。やっ、うんとしよい」

船頭言葉は馬子言葉と並んでそれ自体が荒いのと、わざとどこの土地か分からないように拵えてあるようである。乗り合い舟や馬を連れた馬子は船場周辺では見かけなかったであろう故、船頭言葉や馬子言葉はどことも特定できない田舎言葉を交ぜたものであろう。少なくとも「見よれえ」というような動詞命令形は、船場言葉には見られない。これは動詞語幹の「見」に補助動詞の「よる」命令形を接続したものである。「出す」の連用形が「いだいて」というようにイ音便になっているのも特徴的である。「おえりゃせんわい」というのは部分的に備前辺りの方言かとも思われる。「なんかすぞい」というのは、疑問詞の「何」に本動詞「言う」の言い換え卑罵語「ぬかす」、終助詞の「ぞい」という構成になっている。「ぞい」は神戸方言にも見られる終助詞であるが、いかにも荒くれた語感である。拙著『上方落語にみられる待遇表現』では、「なんかしてけつかんねん」というような二重卑罵語が無標で、「何ぬかす」というように本動詞だけで補助動詞を伴わない単独卑罵語というものは有標であることを示した。ところが上例の「なんかすぞい」は、本動詞「ぬかす」だけで補助動詞がない単独卑罵語である。「やがる、くさる、けつかる」というような補助動詞との併用を避けているように思われる。

前後には、下座で歌う舟歌が挟まれる。「やっ、うんとしょい」というのが舟歌に入る切っ掛けである。ここでサゲなしに嘶を切る演出も多いのであるが、本来は伏見と天満のちょうど中間、枚方の宿で五十両という大金を盗んだ男が下船するという筋が挟まれる。怪しいと気づいた船頭が機転で舟を反転させて上りの舟と見せかけてその男を乗せ、無事に五十両を取り返した、というようになっている。サゲは、その御礼に船頭が五両貰うというので「権兵衛菟蓐、船頭が利」である。元は「権兵衛菟蓐、しんどが利」と言うのであるが、この言い草が廃用になったので途中で切ることが増えたのであろう。

ここで、この嘶に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表二 『三十石舟』における人称代名詞の使用例

自称詞	
話し手	自称詞
喜六、清八	わし わい
人形屋	わし わい
船宿番頭	私
船客の男	私 わて
空想の女	私

対称詞	
話し手	対称詞（相手）
喜六、清八	お前（互い、人形屋）
人形屋	あんた（喜六）
船宿番頭	あんさん（客）
船客	あんた（互い） お前（船頭）
船客の男	あんさん（女）
空想の女	あんさん（男）
船頭	お前（船客、娼妓）われ（互い）

場面転換も多く、それに連れて人物も多様である。人形屋や船宿の番頭など、客商売ではそれ相応の気遣いが必要である。「あんさん」辺りが無標で、人形屋が喜六に対して「あんた」と言うぐらいまでは許容されるのであろう。同じように船客を相手にするとは言え、船頭は別格のようである。つまり、舟に乗せるまでは船宿で帳面付けをするなどして対応を済ませてしまうので、船頭というのは上り下りの運航を請け負うだけとも言える。一瞬の判断が生死を分けるような状況も有り得るので、言葉が荒い……というような後付けの理屈付けをされることも多い。船客に対しても「お前」呼ばわりであったし、言葉遣いだけではなく話題にも気性の荒さを強調しているような側面が窺える。舟が出る前に船客の男が、船頭が無理を頼んでもう一人乗せて欲しいというお女中との妄想を繰り広げる中では、お互いに「あんさん」と呼び合う態である。自称詞はいづれも私という標記であるが「わたし」であろう。『とっておき米朝嘶』に収録されている『三十石舟』は、前半を枝雀師、後半を米朝師で語り継ぐという趣向になっていた。前半はちょうど男の妄想までの場面であったが、上掲（9）のように天

満に着くまでではない。女の自称詞も出てこないのである。男の妄想をどこまで繰り広げるかというのは演者の考え次第である。引っ張れば引っ張るほど深入りする故に、どこで切り上げるかを慎重に判断せねばならない。

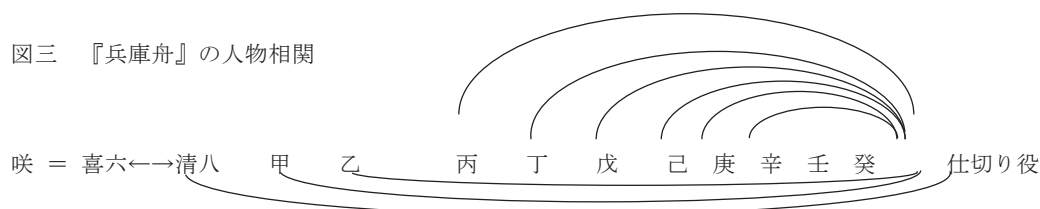
船旅ものは、乗り合いが多いとネタの幅が広がる。お定まりの国を尋ね合うネタから、謎かけや問答など、船旅ならではの掛け合いになる。

第三節 『兵庫の渡海 鱧の身入れ』

もう一題、船旅のネタを見してみる。東の旅に対して西の旅は、四国の金比羅さんへお詣りをして帰りは播州路の松を巡り、兵庫から天保山まで舟で帰ってくるというのであるが、『伊勢参宮神之賑』のように系統だった噺にはなっていない。『東大落語事典』には『播州巡り』で見出しがあるが、「金比羅」では見当たらない。同事典は上方噺と江戸噺、合わせて一二六〇篇を見出しとして掲げているので、ここに見出しとして挙がっていない噺は現代に伝わっていないと考えて良いのであろう。本節で扱う噺は『桑名舟』という見出しで挙がっている。別名は『伊勢詣り』、『桑名の鮫』、『兵庫舟』、『ふかのみ入れ』と多様である。

ここで、『兵庫舟』の人物相関を図示しておこう。

図三 『兵庫舟』の人物相関



乗り合い衆は、ただ偶然に同じ船に乗ったというだけである。噺の運びから、僧侶は乗っていたが侍は乗っていなかったようである。そういう事情もあり、総員が何人乗りかは分からないものの、全員が横一線に並ぶような図になった。

他の旅ネタでは見られないのであるが、『兵庫舟』では出立前に喜六が妻女と交わした水杯の場面を語っている段がある。喜六が一人でべらべら喋っているのであるが、対話風に再構築してみる。例によって妻女の名をお咲さんとしてある。

(11) 咲 「ちょっとあんた、起きとおくはなれな。こちの人、起きとおくはなれ言うのに、この人、まあ、よう寝て。ちょっとあんた、起きとおくはなれ」

六 「かなわんなあ、よう寝てるのに」

咲 「まあ、男というのは悪性なもんや。ようそない、すやすや寝られること。明日旅に出たら、長いこと顔も見ることだけへんに……わて、さびしいてかなわん」

六 「お父つあんもお母はんもいてるがな、お前一人放っとくわけやない」

咲 「そら、お父つあんもええ人やし、お母はんも親切な人やけど、私何も、お父つあんやお母はんのところへ嫁いできたんやないのや。あんたの嫁としてここへ来たんやさかい、あんたの顔を一日でも見なんたら、心細うてしょうがない」

六 「長いこと顔が見られへん言うたかて、そら旅へ出るねやさかい、しゃあない」

咲 「ほな、わて、あんたを旅へ出したら、もう毎日毎日心配なことがある」

六 「そらなんやねん」

咲 「行く先、行く先に、ええ女子はんがいてるに違いない。あんたというのは浮気な人やさかい、旅の間に、どっかできれいな女子はんにでも会って、ああ、わしはもう大坂へ帰るんいややあてなことになって、そっちへ心移されてしまたら、私はもう生きてるかいがないよってに（以下、略）」

お咲さんが焼き餅を焼くことについて、喜六の惚気である。噺の演じ方として、このように再現される対話篇は全て元の会話をありのままに忠実に喋っている。つまり、噺家が人物になりきって話し方の細部まで再現するのと同じ要領で、男女の語り分けなどもそっくりそのままに喋るのである。ここでも、出立前夜に二人が語った内容が忠実に再現されている。喜六がお咲さんの声色まで真似るので、清八は「通ってる人が、お前の顔見て笑てるがな」と注意を促すほどなのである。

さて船中、乗り合いの中では生国の尋ね合いをするにしても一人、仕切り役が自然発生的に現れる。誰が指図するともなく、「あんさん、お生まれは」と順番に尋ねていく役回りである。その後は、謎かけに移る。「何々とかけて、なんと解く。その心は、い」という頓知になっている。

船旅に付きものは、生国の尋ね合いである。一人が乗り合い衆に生国を尋ねるのであるが、十人ほどが次々と答えている。

(12) 「あんさん、どちらのお方で」「わたしは上州です」

「遠いところから来てはんのやなあ。上州でやすか。あんさんは」「わたしは三州です」

「ああ、三州は三河の国。五万石でも岡崎様は……という歌がございますなあ。えー、そっちゃんのお方は」

「えー、私は雲州で」

「おっ、雲州は出雲の国。出雲大社のあるところ、へえへえ、そちらさんは」

「私は和州の人間で」

「和州といえば大和の国。大和は国の始まりてなことを言いますなあ。そちらはんは」

「わたしは泉州で」

「ああ、泉州堺は所の始まりてなことを言いますな。へえ、そちらさんは」

「私は勢州で」

「お伊勢はんですか。これはまた結構なとこでんなあ。そちらはんは」

「わたしは因州です」「因州因幡の鳥取てな歌がございます。へえへえ、あんさんは」

「わたしは播州で」

「ああ、播州は播磨の国。松の名所ですな。あんさんは」

「わたしはどう州です」

「もし、どう州てなとこおましたかいな、もうし。どう州というのはどちらです」

「大坂でんねん」「大坂のことどう州と言いますか」

「いや、大坂の堂島でんねんけどな。つい皆が州、州言いなはるさかい、州がうつって」

(中略)

「あんさんは」

「わたしもどう州です」「ああお宅も堂島で」「いや、道頓堀や」

「あんさんは」「わたしもどう州」「堂島ですか、道頓堀ですか」「^{どしやまち}道修町です」

船旅で大勢と乗り合わせると、このように生国を尋ね合うのが話題として最も無難で自然であろう。そこでは常に、旧国名を何州というように言い換えるのが半ば必然となっている。そこで当たり前「摂州の大坂」と答えていたのでは工夫がないとでも考えた大坂者が堂島、道頓堀、道修町と「ど（う）」で始まる地名を「どう州」と勝手に呼んだという仕掛けになっている。ここまでは他の船旅ネタと同工異曲である。

兵庫の港を出てから天保山を目指して舟は進んでいたのであるが、謎かけをしている間に気が付くと途中で止まっている。鱻が船客の誰かに身入れをして、舟を停めたというのである。誰に身入れをしたかは、客が水中に流した持ち物で分かるという。場面は、巡礼の親子が杖や笠を流すという段、地語り入りである。

(13) ^{とも} 鱻の方に座っておりました親子連れの巡礼。母親の流しました杖は無事に流れましたが、娘はんのほうが、笠をばいと投げ込みますと、これが^{もんどり}翻筋斗打って海中へずーッ（鳴り物〈ドドド〉）。

客 「ああ、えらいこっちゃ。鱻が巡礼の娘に魅入れたで」（中略）

蒲 「あっあー（あくび）……がやがやと、うるさい奴やなあ、ほんまに、お前ら（中略）」

客 「もし、この騒ぎのさ中に寝てる人がおましたで。あんた、今まで寝てなはったんか」

蒲 「（略）鱻が巡礼の娘に魅入れした、それで船が動かん。何をぬかしとおんねん。魚の分際で生意気なことをぬかすな。人間の娘食らうやなんて、ちとぜいたくすぎるわい。どけっ、そこを。俺がいっぺん鱻に掛け合うたる」（中略）

ふかーと呼びますと、鱻が海の底から大きな口を開けて、それへずーッ（鳴り物〈ドロドロ〉）

蒲 「われか、人間の娘食らうなんて生意気なことぬかすな。よしっ、食らわたる。もっと大きな口開けい」（中略）

ぼーんと吸い殻を放り込むと、よっぽど熱かったものとみえて、鱻は海の底へずーッ（鳴り物〈ドドド〉）の後、「水音」、ほどなく止まる）

客 「もうし、船が動き出したで。はあ、えらいもんやなあ。この人のおかげで船が動きだしたがな。（中略）強いお人でんなあ」

蒲 「何をぬかしてんねん。鱻でも鮫でも、わしの手にかかったら、そんなもん、みなすり潰してしもたるのやさかい」

客 「へえ、あんたのお商売は」

蒲 「^{どこば}雑喉場の、蒲鉾屋や」

雑喉場というのは、往時の魚市場で、元は西横堀から分岐した京町堀の川口、今でも残る木津川橋の辺りにあった。^{*2}ちょうど、兵庫からの舟もここら辺りに着いた。確かに、蒲鉾屋にかかれば鱻であろうが鮫であろうがすり潰されてしまう。蒲鉾屋と聞けば、言葉の分かる鱻も退散するであろう。職業柄、鱻や鮫を扱い慣れていると共に、気性も言葉遣いも荒く、剛胆であるという人物造形がなされている。

ここで、この噺に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表三 『兵庫船』における人称代名詞の使用例

自称詞			
話し手	自称詞		
喜六、清八	我が輩	わし	わい
お咲	私	わて	
船客	私	愚僧	わし
蒲鉾屋		わし	俺
対称詞			
話し手	対称詞（相手）		
喜六、清八	お前（互い、お咲）		
お咲	あんた（喜六）		
船客	そちらはん（互い） あんさん（清八、互い） あんた（互い）		
蒲鉾屋	われ（鱈）		

船に乗った途端に喜六が言う「我が輩」というのが特筆ものである。『日本国語大辞典』では、『漢書列伝綿景抄』（十五世紀）や『焦門一夜口授』（十八世紀）の用例も挙がっているが、一般的には明治時代に書生言葉として流行したように思われている。喜六がこのような語彙を知っていたこと自体が意外であり、またこのような状況でその語を発するという行為も驚きである。この語は他では用例を見かけない。

大勢の乗り合いも「船客」と一括りにしたので、多様な人称代名詞使用が見られる。自称詞は大半は「私」として、他人行儀である。僧侶も混じっているので、「愚僧」を採っている。対称詞では、「そちらはん」も珍しい。大勢の乗り合いで次々に名指ししていくという状況での用例であろう。敬度は「あんさん」よりも高く、他人行儀感も初対面ならではの極に触れている。蒲鉾屋が鱈を「われ」と呼んでいるのは、ある意味では必然である。言葉を解するという前提にはなっているものの、舟を停めたばかりか巡礼の娘を所望したという憎むべき存在である。

第四節 『^{じ ごくばつけいもうじやのたわむれ}地獄八景亡者戯』

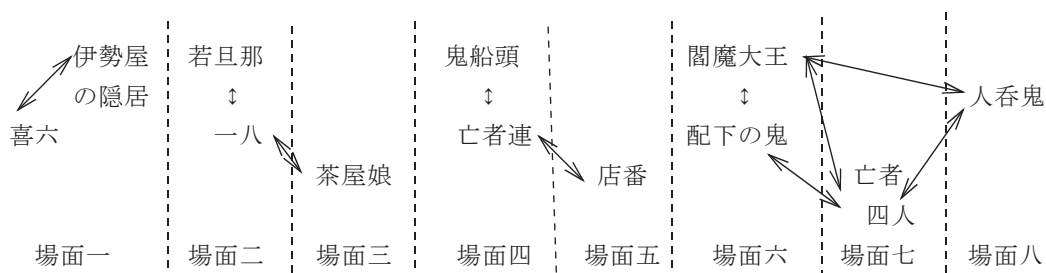
旅ネタでも随一の大ネタであるだけでなく、上方噺全ての中で演者にとっては最難関と言える大長編である。通しで語ると一時間を超え、鳴り物もふんだんに入って大掛かりである。外題も、『伊勢参宮神之賑』と同じように歌舞伎風に凝っている。高座に掛ける折の実演時間で肩を並べるのは、『三十石』を京見物から伏見人形、枚方の宿まで通した折であろう。それだけの長編になったのは、場面が次から次に移って登場人物も入れ替わり立ち替わりするからである。場면을整理してみよう。

一． 地獄の入り口。鯖にあたった喜六が、伊勢屋のご隠居と同道する。

- 二. この世で道楽を尽くした若旦那が、芸者や幫間を引き連れてあの世巡りをする。
- 三. 奪衣婆の身の上話を娘が語る。
- 四. 鬼が三途の川を渡すのに、渡し賃を取る。
- 五. 三途の川を渡って、念仏町と芝居町。
- 六. 閻魔の庁でお裁きを受ける。
- 七. 四人の亡者が、熱湯地獄や針の山を巡る。
- 八. 四人の亡者を人吞鬼に吞ませる。

外題に合わせて八場面に分けてみたが、実際にこれと同じような場面転換が行われているのである。場面三と四は、演者の意図で長くも短くもできる。時事ネタを織り込むのも自由自在である。場面三は奪衣婆の身の上話を茶屋の娘が一人語りするのであるが、場面四、三途の川渡しでは鬼の船頭が亡者に死因を尋ねていく。このように、人物も場面毎に様変わりする。その相関を場面別に図示してみよう。各場面での垂直関係は相対的なものであり、場面が移ると立場も変わる。

図四 『地獄八景亡者戯』の人物相関



場面六以降は閻魔の庁において大王が極楽へ行くか地獄に墜ちるかのお裁きをするというので続いている。場面七と八は、大王に名指しされた四人の亡者が地獄巡りをするようになるが、それぞれの得意技を繰り出して難を逃れる。業を煮やした大王は、人吞鬼を呼んで四人を吞ませてしまう。人吞鬼の腹中では、医者^{いしや}の知恵で大暴れをして人吞鬼を困らせる、という奇想天外な筋書きである。発想の奇抜さという点では、上方噺でも群を抜いている。場面転換の多さで、「次はどうなることか」と聴き手に息をもつかせぬ筋運びである。人物層を大別すると、大王－人吞鬼－配下の鬼という地獄界の役付と、亡者の連中に二分することができる。

まずは場面一、冥界への入り口である。喜六と伊勢屋のご隠居が冥土の旅路に差し掛かる。「ぜん」という鳴り物が入る。

(14) ここにございましたのが我々同様という至って気楽な男、よそから大きな鯖をもらいまして、手料理でこいつをアテにして一杯呑んだところが、それに当たったんですかなあ、ゴロツと横になって寝ますと、夢ともなく現^{うつ}ともなく、空々寂々として暗^{くら}い所へ出てまいりました。前へ行く者、あとから来る者、銘々角帽子^{すんぼうし}という三角の布を額に当てまして、首からは頭陀袋、手には麻幹^{あがら}の杖をつき、糸より細い声を上げ「おーい」

と、喜六が伊勢屋のご隠居に呼びかける。「ご機嫌さん、と言いたいところですが、これはまたエライ所でお目にかかりましたな」と世間話をしながらの道筋を辿る。

続いて場面二に移ると、先ほどの物静かな二人連れとは打って変わって賑やかな団体さんである。この世で遊び飽きたという若旦那が「もう行くともないさかい、ここは一つ地獄見物でしょやないか」と、これもまた至って気楽な旅である。芸妓や舞妓、お茶屋の女将から仲居から太鼓持ちまで引き連れ、「わあわあ喧しう言うてやってまいります、その道中の陽気なこと」と、また鳴り物が入る。この場面では専ら、幫間の一八が生前に若旦那の近辺で手を染めた悪事の数々を白状してしまう。間に入って手切れ金の交渉をした折りに、三割を自分の懐に入れたこと、若旦那のお供で別府や箱根に泊まった折りに時計や写真機などくすねた、と洗いざらい並べ立てたのであった。寛大な若旦那は、一八が白状したのを「懺悔」として、許すのであった。

場面三では、この一行が三途の川を渡る段になって思案に暮れる。若旦那は、地獄絵図で見た^{だつえ}奪衣婆に着物をはぎ取られる心配をしていたのであった。幫間の一八が「お婆んを金でうんと言わすんやったら、わてを忘れてもろたら困る」と大見得を切って、様子を探りに茶店に入っている。茶店の娘から「奪衣婆やて、よっぽど古い話だっせ」と大河小説のような半生記の一部始終を耳にする。次は粗筋で、本来は合間合間に一八の相槌が入るのであるが、茶店で店番をしていた鬼の娘が一人語りしているような体にする。

(15) 終戦からこっち、地獄もよっぽど変わりましたな、「ああいうことはもうやめて、もっと民主的にせないかん」いうて、ああいうのはみな廃止になりましたん。あのお婆さんのうちは先祖代々、家の権利とか格式とかいうので、ズーッと亡者の着物剥ぎ取るのん商売にしてはったんやけども「それはいかん」ちゅうことになってな。

その当座は失業保険なんかもろてはりましたけど、それでは困るいうて閻魔はんのところへ相談に行かはったん。ほな閻魔はんも「お前とこはズッと代々あれを家業にしてきたんやさかい困るやろ」いうて、相談に乗ってやってるうちにな、お婆さんちょっと器量がええもんやさかい、そこへ閻魔はん目えつけて、このお婆さん二号さんにしはりましたな。閻魔はんのお世話になって困いもんになってましてんけど、退屈なさかいな「何か商売がしたい、居酒屋でも開こか」ちゅうて。

それで、一軒店持ちはりました。せやけどまあ、閻魔はんも忙しいさかい、月に一遍来るやら二遍来るやら分からん、お婆さんも退屈なもんやさかいちょっとヨロめかはったんでっせ。店員の赤い衆（若い衆、赤鬼）がちょっと鬼前（男前）がええもんやさかい、閻魔はんの目え盗んで問鬼（問男）しはって。この店員さんが大学生、獄大（地獄大学）の学生さんでな。これが一番の名門でんねん。なかなか入られしまへんねやで。受験地獄はこっちが本場で、娑婆が真似してまんねんで。

その間鬼のことが閻魔はんには知れたんですけど、閻魔はんさばけたお方「まあわしが忙しいさかい無理もない、好き合うてんねやったら夫婦になったらええがな。せやけども、目の前でウロウロされたら困るさかい」いうて、地獄追放になりましたな。

お婆さんの遠縁に当たるのが、雷の五郎八つつあんでな、ここ頼って行きはりました。で、その学生さん赤い衆がな、夕立の水汲みに雇われて行きはった、秋になって暇になったら、慣れん仕事やったもんやさかい体傷めてなあ、もうズッと寝たきりなってしまうて、お婆さんは

さあ、医者には見せんならんは、薬代は要るは、食べてはいかんならんは。困った挙句とうとう娼妓にならひましてな。お婆さん器量がええいうて、なかなか評判よかったんですけどな、どんなお客にも出たもんやさかい、娼妓から来たての亡者に悪い病氣もらひましてなあ。可哀相に毛は抜けるは、皮膚はガサガサになるは、学生さんは逃げてしまうは、体ガタガタになってしもて、気の毒にとうとう六道の辻で「野垂れ生き」しはりましたんや。

娼妓へ出て、なんでも今までの罪滅ぼしやいうて、四国の方お遍路さんで回ったはりました。そういう噂は聞いてたんやけど、いつの間にやらまたこっち舞い戻って来はってな、「我が半生を語る」ちゅうて『週刊地獄』ちゅう週刊誌にズッと連載したら、これが評判になって単行本が百万冊売れるやら、映画になるやら、お婆さんえらい時の人でんねやがな、

店番の娘は「鬼も十八、番茶も出花」と自らは何年経っても十八だと言うが、話は奪衣婆の一代記である。「なんでもこの世の物が地獄にもある、むしろ受験地獄なんかこっちの方が本家本元」というような逆転の発想が面白さの大元であろう。「間鬼＝間男、鬼前＝男前、赤い衆＝若い衆」というような言い換えも気が利いている。「野垂れ生き」というのも、野垂れ死にの裏返しである。「地獄大学」を「獄大」と略称するのも、現世流である。長い長い奪衣婆の半生記であるが、戦後の民主化や失業保険など現世の制度をあの世に持ち込んだり、時事ネタを織り込んだりして、演じる度に斬新さを盛り込むことができる工夫になっている。半生記を週刊誌に連載したり、それが単行本となって百万部売れる、映画化されると、奪衣婆が時の人になる過程を滔々と述べ立てる段が、聞かせ所である。

場面四は、三途の川を渡るのに渡し賃が要するという段で、「なんで死んだかによって渡し賃が違ふ」と鬼の船頭が言う。例えば河豚を食べてあの世に来た連中「四苦八苦の苦しみ、四九が三十六と八九が七十二、合わせて百八、その十倍の一千八十円」という具合に、九九の地口で渡し賃を決めていく。ここは、九九の掛け算で口合い（地口、駄洒落）にする連続である。

川を渡ると六道の辻で場面五に移る。一画に芝居町があって、名優は皆ここに集まっているという。この間は忠臣蔵の通し狂言、初代から十二代目までの團十郎が揃い踏みで、判官が團十郎、師直が團十郎、由良の助が團十郎、お軽も勘平も皆、團十郎、とややこしい。現世では実演不可能な興業である。時に応じて、直前に鬼籍に入った役者や歌手をネタに織り込むことも多い。

またこっちは念仏町である。「閻魔の庁でお裁きを受ける前に有り難い念仏をかうておけば、極楽行きは間違いなし」という訳で地獄の沙汰も金次第、宗旨宗旨によって、念仏をかう店は違ふ。真宗は本願寺みたいな大きな屋根の店、法華はひげでびんびんと跳ねたような字で「南無妙法蓮華経屋」という看板、天理教は「悪しきを払うて助けたまえ、天理教の尊屋」という具合である。ここでも新興宗教を織り込んで、時事ネタにするという傾向がある。

場面六は、閻魔の庁である。「お経もかうて、これで閻魔さんのお裁きを受けられる」という思いに反して、閻魔の庁は門を閉ざして亡者が門前市をなしている有様である。このお役所は毎日開かず、たまにしか開廷しないという。偶々この日は閻魔大王が出庁し、「先代大王の一千忌につき、一芸ある者は申し出よ」とのお達し。ここは演者の腕次第で、手品、曲^{きよく}屁、落とし話で来年のことを話して鬼を笑わせたりする。ここは話芸やら、口上^{くしやう}の入る芸ならなんでもありで、ここでも時事ネタを織り込むことができる。

場面七は一頻り芸が披露された後で、大王が「これから呼ぶ四人の者を除いて、皆極楽に通っ

てよろしい」とのお達しである。皆が喜んで極楽に行った後で残されたのが、次の四人組であった。

医者^{ほら}の山井養仙（病い、ようせん（よう治さん）の地口）

山伏^{おふくかい}の螺尾福海（「ほらを吹く」の地口）

軽業師^{けいぎし}の和屋竹の野良一（『軽業』でも登場した実在の早竹虎吉という名を借用）

歯抜き師^{はぬきし}の松井泉水（これだけは真面目な名）

松井泉水を除いて、口合いで付けたような出来合いの名前ばかりである。しかし、得意とする専門の業はよく練られている。大王は四人にそれぞれ「助かる病人まで死なせた、怪しげな術を用いた、見る者をはらはらさせた、丈夫な歯まで抜いた」といちゃもん紛いの罪状を擦り付けて、まずは熱湯地獄に送り込んだのであった。ところが山伏が水の印というのを結ぶと、熱湯が日向水になって、入り加減のお湯と転じる。四人は「嬬が無精して湯灌もしてくれなんだ。ああ、ええ湯や」と温泉気分である。鬼がこの事を大王様に報告したので、「それなら今度は針の山へ」と方針転換する。ここでは軽業師が他の三人を肩に乗せたり、ちちくま（肩車）したりして針の山を軽々と登ってしまう。そして降り際には、針がばりばりと折れてしまう始末で、鬼どもは手に負えない。

そして最終場面、困り果てた大王はとうとう四人を人吞鬼^{じんどんき}に始末させることにした。文字通り人を吞む鬼、見上げるほどの背丈である。「大王様、お呼びでござんすかい」と相撲取りのような言葉遣いにしてある。ここでは歯抜き師が人吞鬼の歯を全部抜いてしまい、四人は嚙まれずに丸呑みにされる。腹の中に入ると、医者が活躍する。無論、現代医学では考えられないような架空の器官を羅列している。くっしゃみの紐を引いたり疝気筋を触ったり屁袋を蹴ったりして鬼を苦しめるというのである。四人の分業は、実によく工夫されている。鬼は辛抱できずに、大王に訴える。

(16) 鬼 「大王様、こうなったらあんたを呑まなしゃあない」

王 「わしを呑んでなんとする」

鬼 「大黃呑んで下してしまうのやがな」

とサゲになっている。大黃というのは漢方薬で、下し薬であり、大王との掛詞である。配下である人吞鬼が閻魔大王を「あんた」呼ばわりしている。

後半、四人組が地獄で暴れ回るのが痛快で、役割分担もよく練られている。特に軽業は「しころ」というお囃子に乗って針の山を上がったたり降りたり、賑やかである。他にも随所で鳴り物が入るので、囃子方に人手が要る。上方の古い型を残しながら、時事ネタを入れたり「一芸ある者」では自分の得意な芸を入れたり、様々に工夫のしようがある大ネタである。

ここで、この噺に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表四 『地獄八景亡者戯』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
喜六	私
ご隠居	わし
若旦那	わし
一八	私 わたい
亡者	私 わたい わて わい 俺
大王	わし
人呑鬼	わい

対称詞

話し手	対称詞（相手）
喜六	あんさん、あんた（隠居）
ご隠居	おまはん、お前（喜六）
一八	あんさん（茶屋娘）あんた（若）
若旦那	お前（一八）
船頭	お前（亡者）
店番	あんた、おまはん（亡者）
大王	そのほう（亡者四人） お前（亡者）
人呑鬼	あんた（大王）お前（亡者）
亡者四人	あんた（互い）お前（人呑鬼、互い）

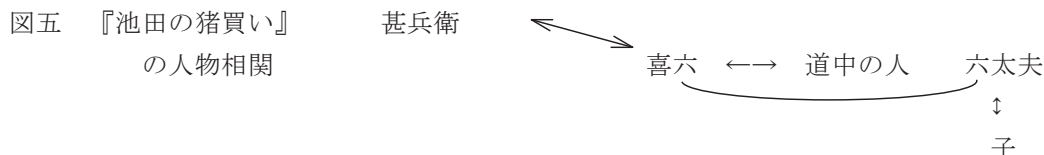
この表で見られるように人物像が多様で、それに伴い人称代名詞の使用も多様である。但し、例えば「亡者」と一括りにしたが、ここには男女、年代層も種々の複数人物が入り交じっている。渡しの船頭に対しては、鬼への怖れもあるのか「わたし」と畏まっている。これと「わたい、わて」までは男女共用であるが、「わい、俺」は男性専用である。この辺りも、野卑度では男性に振れる傾向が窺える。

対称詞では、大王が亡者に呼びかける「そのほう」が尊大語で、亡者連中の「あんさん」以下「あんた、おまはん」までは卑尊度で中立に近づくと考える。「お前」となると、ご隠居から喜六、若旦那から一八、大王や鬼の船頭や人呑鬼が亡者に対してと、立場的な上下関係が前提となっていることは多い。場面八では亡者同士が「お前」と呼び合っている。全般的に、閻魔大王の配下とは言え鬼は亡者に対しては威張っているのである。

第五節 『池田の猪買い』

旅ネタで北の旅というのは、『池田の猪買い』である（第一巻）。船場でも北の端、土佐堀に近い井池^{どいけ}から北へ歩いて行けば、往時でも日帰りできたかというほどの距離である。この嘶には井池の甚兵衛はんという人物が、頼りない男に池田までの道順を懇々と言い聞かせる。嘶『つる』などでも横町の甚兵衛はんとして、物知りで親切な人物像が描かれている。男は話中で名

前を呼ばれていないので、例によって喜六としておく。池田までの道筋は甚兵衛はんに教えて貰っているのであるが、喜六は道々何度も尋ねながら池田に向かう。大坂まで聞こえた、猪撃ちの名人六太夫さんから直接猪肉を買おうというのである。人物相関は次のようになっている。



全体としては、水平に広がった人物相関であると言える。甚兵衛はんと喜六は、親子ほどの年の開きがあって、甚兵衛はんが一方的に喜六の世話を焼いている、という様子が窺えるので、甚兵衛はんを相対的に上位に置いた。六太夫さん宅でも親子の関係がある。場面毎に、基本的に二者の対話で筋が進んでいく。

まずは甚兵衛はんが喜六に池田までの道筋を教える場面であるが、これがまた掛け合いになっている。

(17) 甚 「うちを表へ出ると、これが井池筋じゃ。これをドーンと北へ突き当たる」

喜 「うわぁー、デボチン打つな」

甚 「何でデボチン打つ」

喜 「ドーンと突き当たったら、ゴーンとデボチン打ちまんがな」

甚 「それは言葉の綾じゃ……、この井池の北浜には橋が無いで」

喜 「そうそう、昔から無い未だに無い、これ一つの不思議」

甚 「別に不思議なことはありません、「橋無い川は渡れん」てなことを言うやろ」

喜 「渡るに渡れんことはない」

甚 「どないして渡る」

喜 「船で渡ろか、泳いで渡ろか」

甚 「それではことが大胆な」

喜 「ほたら、どないしょ」

甚 「左へ少し行くと淀屋橋という橋があるなあ。淀屋橋、大江橋、蜷橋と橋を三つ渡る。お初天神の西門のところに紅うという寿司屋がある。この寿司屋の看板が目印やなあ。こっからズーッと北へ一本道じゃ。十三の渡し、三国の渡しと渡しを二つ越える。服部の天神さんを横手に見て、岡町から池田じゃ」

この男、「通りを突き当たればでぼちん（額）をぶつける」とやら、「橋ない川は渡れんか」とやら、問答が掛け合いのようになる。淀屋橋、大江橋というのは土佐堀川と堂島川に架かる橋で、この両橋は現在と同じである。蜷橋は、明治から大正にかけて埋め立てられた曾根崎川（別名を蜷川とも呼んだ）に架かっていた橋である。十三から先の地名は、阪急電車宝塚線の駅名でもあるが、往時は橋がないので渡し船であった。池田は摂津の国でも北の方、神戸の六甲山から京の西山に連なる北摂山系に近い。この辺から丹波篠山にかけては、今でも猪肉が名

物である。脂身の多い肉を綺麗に盛り付けると、牡丹の花を並べているように見えたので、猪鍋のことを「牡丹鍋」とも言う。また猪の身は冷え性に効くというところから、肉食が憚られた時代には牡丹鍋は「薬食い」という隠語にもなった。

あっちで道を尋ね、こっちで道を尋ねして、ようよう池田に着いた時には寒気厳しい折から、白いものがちらちらしていた。連れていた牛が鳴いたのをきっかけに、男に六太夫さん宅を尋ねる。

(18) 喜 「このへんで、あの、鉄砲バーンと撃つ人おらんかえ」

牛飼 「そんな物騒な人はおらんわいな」

喜 「そうあの、ほれ、山獵師の六太夫さんとかいう・・・・・・・・」

牛 「ああ、あんた、六太夫さんと何を尋ねなさるのか。六太夫さんとこならな、ちょっとわしの手の先をみなはれ」 (中略)

牛 「そう、白壁がちらちらと見えて、松の木がにゅーっと出てる家があるじゃろ」 (中略)

喜 「いや、白い壁も松の木もよう見えたあんの」

牛 「ほな、何が見えんね」

喜 「にゅーっと、ちらちらちゅうのが見えん」

この段は、擬態語という観点から面白い。「白壁がちらちらと見えて、松の木がにゅーっと出てる家」というのは、典型的な擬態語である。それを喜六は白壁や松の木は見えるものの、その様態を描写する「ちらちら、にゅーっ」は見えないと言うのである。これは、擬態語の本質を突いている。「ちらちら」は彼方に白壁が見える様態を、「にゅーっ」は庭に松の木が生えている様を説明する副詞表現である。擬態語は視覚と一体になって、目前に展開する状況を生き活きと描写する役割を果たすのである。擬音語が聴覚に頼るのと対照的である。

六太夫さん宅に着いた喜六は、遙々と猪肉を買いに来たと告げる。なるべく新しい肉を、と所望する喜六に「一昨日しとめてきた」という猪が梁に吊してある。それでも納得しない喜六に、六太夫さんはこれから獵に出かけるというので息子と呼ぶ。

(19) 六 「これ、^{いの}猪之よ、猪之よ」

倅 「うーっ」

喜 「わあ、なんやこれ」

六 「こりゃ家の倅じゃ」

喜 「ああ、あんたとこの息子はんか。わしゃまた猪之よっちゅうなり黒いもんが、ぱーっと飛び出したさかい、猪が飼うたあんのかいなと思て・・・・・・・・これ新しいか」

六 「そら何を言うねん。これは家の息子やがな」

喜 「もう山へ行くのんじゃまくさい、これ撃って間に合わしとこ」

六 「あほなこと言うのやないわいな、どもならんで大坂の客人は。これ猪之よ、(中略) おとなしゅう留守番をしとるのじゃぞ」

倅 「んー」

六 「んーちゅうやつがあるかい。返事は、はいとせえ。大坂の客人に笑われるぞ、田舎の子は行儀を知らんちゅうて。はいと言うのじゃ」

倅 「んー」
六 「まだ、んーちゅうてる。しょうのない子じゃなあ」
倅 「父も猪撃^{とと}ったら、じきに帰ってきてや」
六 「んー」
倅 「父かて、んー言うてるやないか」
六 「大人はかめへんわい。ほな客人、出かけようかな」
喜 「んー」

猪之と呼ばれている倅は、まだ十歳にもならぬ童子であろうか、親子の対話が微笑ましい。普段は稀にしか人も訪れることのない山里、話し方など躰も行き届かないことであろう。六太夫さんは倅には言い聞かせようとするものの、自分の返答も無意識に「んー」と言う。「大人はかめへんわい」と開き直っている。喜六が同じように「んー」と返すのは、親子の真似をして面白がるという興が乗ったものであろう。一種の言葉遊びである。この返事と言い、父親のことを「とと」と呼ぶことと言い、田舎言葉らしい味付けがしてある。

喜六は慣れぬ山道を六太夫さんの後を着いて追い掛けて行き、首尾良く猪を撃ち取ることができた。しかし喜六が執拗に「この猪、新しいか」と尋ねるのに業を煮やした六太夫さん、鉄砲を逆手に猪を打ち据える。弾が当たったのではなしに、気絶していただだけの猪は起き上がってとことこと駆けだした。「客人、あの通り新しいがな」でサゲとなる。

ここで、この漸に登場した人物間の人称代名詞使用について表に纏めておく。

表五 『池田の猪買い』における人称代名詞の使用例

自称詞

話し手	自称詞
喜六	わたい
甚兵衛	わし
牛飼	わし
六太夫	手前

対称詞

話し手	対称詞（相手）
喜六	あんた（甚兵衛、通りがかりの人、六太夫）
甚兵衛	お前（喜六）
牛飼	お前（喜六）
六太夫	おまはん（喜六）

このように、登場人物が少ないのに伴い、人称代名詞使用も限定的である。六太夫さんが自称詞を「手前、わし」と併用している以外、全て一通りである。六太夫さんの「手前」というのも、喜六が「山獵師の六太夫さんのお宅はどちらでやす」と尋ねたのに「ああ、六太夫なら手前じゃ」と答えたものである。喜六はこれを「手前、奥」という位置関係のことで勘違いして「何軒ほど手前か」と尋ね直している。

旅ネタではあるが物見遊山ではなく、新鮮な猪肉を求めて北へ向かったのである。池田からさらに北へ、峠を越せば丹波の国である。その先は丹後の国、と続くが上方噺には丹波や丹後に足を向けない。どうしても京に上ることが多かったためであろう。

第六節 纏め

一口に「旅ネタ」と括ったが、旅先によって、またそこでどのような人物と遭遇するかはそれぞれ異なる。『池田の猪買い』というように日帰り圏であれば、言葉も船場と近いように描かれている。それでも多少は田舎感を出すためか、子の返事が「んー」と答えて、「そんな返事してたら大坂の客人に笑われる」と窘められたりする。伊勢詣りでは、帰り道を東海道に取って草津、大津から京に入って京見物をすれば十日ぐらいの行程になったであろう。大津の宿では近郷近在から働きに来ている女子衆が「脛っぽち洗てこまそか」というように喋ったりする。これらは、現実に京や大坂から近いので、聴き手にとっても身近な言葉として捉えられたであろう。

道中は、伊勢の旅などのように常に喜六と清八が二人連れであるのが基本で、折に触れて源兵衛との三人連れになったりする。『池田の猪買い』では一人旅であり、『兵庫舟』や『三十石』では船旅で大勢との乗り合いになったりもする。旅ネタとして、実在の宿や茶屋、旧所名跡を織り込んで旅案内とするのも実用本位であるが、船旅で大勢の乗り合いがわいわいがやがやと好き勝手に喋っているのも趣向がある。

上方噺における旅ネタの特色は、東西南北へと足を伸ばす現実の旅と共に、天に昇ったり海に潜ったり異国や地獄をも巡るという「異界」に赴くというのが奇想天外である。これはまさしく、想像力の産物である。旅というのはそもそも日常からの脱出という意味合いがあるが、異界への旅はその枠を大きく飛び出して尋常ならざる世界に赴くというのである。江戸噺には旅ネタそのものが少ないが、このように異界を巡るというのは、発想さえもない。異界では、閻魔大王を筆頭格として配下の鬼や乙姫様、竜宮城の女官など話し相手も通常ではない。そのような立場上の差異は、自ずと言語化されていた。閻魔大王が亡者四人に対して「そのほう」と呼んでいたのは、尊大語の典型的な対称詞である。

しかしそのような非対称的な立場上の差は、異界で展開されたという状況からして例外的であった。『煮売り屋』のように日常的な旅で喜六と清八が店主と話している場面では、店と客という認識は自ずと双方にあり、対等に近い応酬であった。店が村の寄り合い用にと特別に用意した烏賊の木の芽和えを喜六と清八に出すことを頑なに拒んだことなど、寧ろ店側が優位に立っているかのようでもあった。

旅ネタは、現実世界で諸国を巡るものは道順にしても茶屋や宿の名前にしても実在の通りを詳細に語って、実際に旅をする際に参考になるほどであった。逆に異界を巡る旅は、思い切り現実世界を離れるという空想力を働かせている。この対比が上方噺らしい側面である。

注

- * 1 狐や猫など怪しの者が、人の言葉を喋るという場面で、独特の抑揚を付け、語尾を伸ばすような語り口になる。笛の甲高い音を伴う〈来序〉という鳴り物が入ることが多い。
- * 2 京町堀は、一本北にあった江戸堀と共に埋め立てられた。木津川橋は、今では木津川に

架かっている。京町堀も江戸堀も、町名としては残っている。

参考文献

- 泉文明（2012）『京ことばとその周辺』京都：晃洋書房。
- 稲垣史生（編、2007）『三田村鳶魚 江戸生活事典』（新装版）東京：青蛙房。
- 井上章一（2015）『京都ざらい』東京：朝日新聞出版。
- 井上章一（2018）『大阪的』東京：幻冬舎。
- 大淵幸治（2022）『本当は怖い京ことば』名古屋：リベラル社。
- 桂文我（2014）『上方落語「東の旅」通し口演 伊勢参宮神之賑』東京：青蛙房。
- 桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
- 桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻 増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp.3-22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉よう子、他（編）所収。
- 角岡賢一（2021）『上方落語に見られる待遇表現』東京：くろしお出版。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 陣内秀信（2023）「都市空間のなかの長屋」田中優子（2023）所収。
- 関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇B。
- 田中優子（編著、2023）『落語がつくる〈江戸東京〉』東京：岩波書店。
- 田中優子（2023）「『長屋』という思想」上掲書所収。
- 東大落語会（編、1994）『増補 落後事典』（改訂新版）東京：青蛙房。
- 秦恒平（2012）『京のわる口』東京：平凡社。
- 前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 三島佑一（2016）『船場道修町 薬・商い・学の町』大阪：和泉書院。
- 山田庄一（2021）『京なにわ暮らし歳時記』東京：岩波書店。